OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪帝国大学の創立と法文経学部の創設
Author(s)	
Citation	大阪大学史紀要. 1981, 1, p. 70-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8399
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

座談会

大阪帝国大学の創立と法文経学部の創設

藤野恒三郎（名誉教授）
宮本又次（名誉教授）
芝哲夫（理学部）
熊谷開作（法学部）
作道洋太郎（経済学部）
三谷裕康（工学部）
（司会）中馬一郎（医学部）

（昭和五五年三月一日　待兼山会館会議室）

中馬　それではごあいさつを申し上げます。宮本、藤野両先生には、ご多忙中、ご無理をお願いいたしましたところ、快くご出席いただきまして、どうもありがとうございました。ご案内のように大阪大学では、創立五十年史を編集することになりまして、目下資料を集めている段階でございます。

古い先生方にいろいろお話をお聞きする予定をいたしておりますが、本日はその第一回といたしまして、両先生にいろいろお伺いしたいと存じます。

主として藤野先生には、大阪大学の前史と申しますか、創設の時分のこと。宮本先生には、法文学部創立前後のころということを重点にお聞きしたいと存じます。

大阪帝国大学の創立

中馬　まずそれでは皮切りに、私から藤野先生にお伺いします。ここにございます『大阪帝国大学創立史』という書物を、各委員一とおりは読んでいるつもりでございますが、まず、大阪に官立の総合大学を誘致すると言いますか、設置を要望するという気運の起こった主な理由というのは、どういうところに集約されましょうか。

藤野　その本に書いてあるとおりなのですが、これをつくった元大阪医科大学幹事、元大阪帝国大学事務官・西尾幾治、この人がすべてのかぎを握っているキーポイントの人物ですよ。この人は私らが学生としてよく知ってるんです。私ら学生に酒も飲ましてくれたし、芸者遊びも実際に教えてくれた人です。この人がその当時医科大学学長の下の事務長で、元大阪府の役人から大阪医科大学の事務長になりまして、そして全部を取り仕切った人ですね。この人がおったから、金何百万円かという隠し金をつくり得たという。この人らはひそかに、官立医科の設立には金が要る。急に財界から集めてもいかんというので、病院の収益を貯金しとったわけですからね。それは後でわかったことです。どこかに書いてあるかもしれませんけど、近ごろその話を詳しくわれわれに聞かしてくださったのは、理学部の名誉教授の仁田先生です。仁田先生に、名誉教授会を私が世話するようになってから、何か講演してくださいと言ったら、じゃあ赴任してきた当時の話でもす

るかと。何か、大阪医科大学が医学部になり、そのときに金何百万円かの秘密の金を持っておって、これで理学部ぐらいは建ててやると言うたから、日本政府はうんと言ったと。そういう話を、これは仁田先生にいっぺんお聞きになったらいいのにと思うね。私よりよほど詳しいです。

その西尾さんの話は出なかったけど、そんなことができるのは西尾さんだけですからね。西尾さんと楠本学長とがやった。悪く言うたら公金何とかということになって、犯罪行為になるかもしれんです。

この人は、私が聞いておりますのでは、大阪府会の事務をやる事務官やったですね。だからだれに何を話して、だれに何を話してという連絡のことは、若い時分から身についてる人だったんですという話を、ある先輩がしましたよ。そして大阪医科大学の事務長で来て、そして、あの病院に三百何十のベッドがある、あれをいかにして満員にするかということばかり考えとった人ですからね。そして、恵済団の恵済会館というものをつくった人です。あの恵済団の会館ができたときの喜びようといったらないんですわ、西尾さんは。おい、いいものができたから、おまえら来いと言って、あそこでビールを、われわれはあのとき学生じゃなかったかな、ごちそうしてくれました。恵済団は、だから西尾さんが専務理事で、病院の事務長、医学部の事務長で、大阪医科大学の事務長でいて、恵済団の理事長ではなかったですかね。だから、この本は恵済団の金でできてるはずですよ。

中馬　ああ、恵済団ですね。

藤野　発行所恵済団になってる。恵済団はその時分金があったですから、こんなきれいな本ができた。恵済団の倉庫にいっぱい残っとったですよ。私が戦後もらったのも恵済団の倉庫からですよ。

宮本　ぼくもこれもらってますよね。

藤野　金構わずに、こんな非売品ができたんですからね。だから、特別な気運と言うよりも、教授会にも初めは秘密にして、あの二人がやられたんじゃないですか。その時分の教授会に出とった人で、今生き残ってる人は、布施先生だけや。

宮本　大阪にぜひ総合大学をつくらないかんというわさは、気運としてありましたね。飯島幡司先生なんかが、そんなことを言うてはったもんでね。

藤野　あの人そのころ朝日におったん。

宮本　朝日におった時分。

熊谷　ところで、それを見てますと、毎日が非常に力を入れてますね。どうも大阪は毎日が、初めはかなり関係が深かったんじゃないかという印象が強かったですね。

藤野　毎日新聞だと、社長さんは本山彦一ですね。

宮本　あれもええことしてるようやね。富民協会とか何かやって、あのころ考古学の方にも力をいれ、それから発掘にもスポンサーになってましたし。

藤野　毎日新聞といえば、大阪医科大学と特別な関係がありましたのは、大浜で全国相撲大会があった、あのときに大阪医科大学チームはいつも優勝候補ですわ。優勝せんけども、優勝候補としては有力だ

ったんです。あれは毎日新聞社主催でしたね。

宮本　財界との結びつきは、毎日の方があったんじゃないですか。あれは大体財界新聞です。原敬が社長になったりしてね。

藤野　社長やった時代もありましたな。創立のときは、われわれが先輩の大先生方に聞いたところでは、困ったことには、医学部を最初に移管するでしょう。万事、東京帝国大学医学部が基準になるわけで、東京帝国大学医学部には、歯科学講座なんてものはない、理学的診療科というようなものはないし、寄生虫講座というものはない。それから、薬局長が教授であることなんかもあり得ない。この四人が問題になってくるんですね。その四人が問題になって、そして楠本先生が折衝をして、そして寄生虫学の吉田先生と、薬局長で薬物学の教授である世良さんと、このお二人は、帝国大学になったときには、教授になれなかった。大阪医科大学の教授から講師になったんです。そのときにちょうど、浪高が栄えてきたわけで、吉田先生は大阪府立浪速高等学校教授、そして大阪帝国大学の講師。世良さんは講師のままだったんです。それが昭和六年五月一日でしたからね。昭和九年に微研ができたときにこの二人は微研の教授になったですよ。

中馬　その当時の学部長なり学長は困られたと思いますね。

宮本　何か偉い数学の先生がいましたな。

中馬　小倉金之助先生。

藤野　あの人はもう早うにやめて。

宮本　やっぱりそのときにやめてしもたん。

藤野　そのときには塩見理化学研究所もやめとったんよ。

宮本　それでこっちの浪高へ来られたのですか。

藤野　いいや、浪高は関係ない。大阪医科大学の予科教授。

中馬　その後東京へ行かれたわけですね。

藤野　塩見理化学研究所が設けられて、その所員として招かれ、大正十四年から所長をつとめられた。かたわら予科教授として講義を担当した。帝国大学理学部ができて、講師を兼務したが、昭和十二年研究所をやめて、東京へ行かれたということです。

中馬　さっき、ちょっとお話伺ったんですが、理学部の数学ができるときに、塩見理化学研究所の取り扱いについて、やっぱり大分問題がございましたようですね。と言いますのは理学部はおおむね東京大学から来られたんで、塩見がそうじゃなかったんですかな。

芝　そうです。前からありました。

藤野　前からありましたけれども、東京帝国大学卒業生にあらざる人が入っておったのは、小倉金之助だけですね。

中馬　何かそういういきさつもあったようでございますね。

藤野　浅田先生は東大でしょう。

芝　はい、みんな東大ですね。

藤野　それから岡谷。これは長岡半太郎の娘婿ですわ。この人なんかはすでに来ておったし、それからあと、近野さんという大阪医科大学卒業生の医学博士が一人おりましたな。古武先生の弟子ですが、それだけですからね。この辺のことを、もしお調べになるんだったら、今では理学部の名誉教授の佐多さんが詳しいですわ。

宮本　塩見政次さんの伝記がありましょう。あれを佐多さんが持ってはるわ。あの人からぼくはもらったんだから。塩見さんのことを書いてある。

藤野　私も佐多さんからもらってます。

宮本　佐多さんはようけ持ってはるらしい。佐多さんの伝記にも、塩見理化学研究所のいきさつが割に詳しく書いてます。

藤野　あれは本当に、佐多愛彦先生は大阪にやがて総合大学ができる、そのときの理学部の核にするものだと、そういう本当の構想で塩見さんから金を絞り出してきて、あれをつくられたんだということです。

宮本　あれは医学校の卒業生やな。塩見さん。

中馬　明治三十三年、本学出身の医家塩見政次氏と書いてありますね。

藤野　何しろ事業家ではありませんから、親の財産を相続してから。

中馬　でしょうね。当時の金で一〇〇万円なんていうのは、とても一医師がよくするところではないわね。

宮本　何か事業をされたんと違いますか。あの当時亜鉛の事業でもうけられたんです。

当初なぜ文科系ができなかったか？

作道　昭和六年段階で、スポンサーが、随分財界人がたくさんいるわけですけれども、なぜ経済とか文学部とか、文科系が総合大学として、この時期では考えられなかったのですか。

宮本　文部省の方針と違うかな。名古屋もそうやったから。

作道　財界は、しかし希望したでしょうね。これだけ金を、塩見さんも一〇〇万円を寄付するとか。

藤野　その塩見さんの寄付は、ずっと前でありまして、昭和六年の国立帝国大学をつくるという段階で、財界の人が、それこそ手弁当で走り回ってくれました。手弁当で走り回ってくれたことは、いっぱい記録がありますけれども、そこで、法文経をつくるという話は、

作道　全然出ませんか。

藤野　どこにもありませんね。

中馬　なぜでしょうかね。

作道　京都にあるから要らんというんですかね。

宮本　大体そんな話もあったんだけれども、名古屋とか、新たにできる帝国大学は文科系をつくらないという方針やなかったですかね。せやからできなかったんで。

作道　それはいつごろから、そういう方針が。

宮本　ぼくらは大分前から言うてましたで。ぼくらはずっと前に、飯島幡司先生かだれかが講演してますわ。総合大学をつくらないかんということを言うて、そういう講演をしてましたから、そういう運動

があったんやないですかね。

作道　飯島先生はどういう所で。それは印刷になってますか。

宮本　捜したらわかりますわ。どこかに置いてあるんですわ。あとで大原社会問題研究所の本を安井知事が買うたわけですわ、安い値段でね。そのときに将来大阪に総合大学ができたら、渡すという話やったんよ。それは約束やったです。それは大原文庫のことをぼくが書きまして、大阪図書館の雑誌に載せましたよ。『大阪の研究』の中に入ってますわ。その中にそういうことを言うてました。

熊谷　昭和四年に、第何帝国議会か知りませんけれども、四七件、学校関係の設立についての建議書が一斉に出てくるんですね。そのときに、名古屋を総合大学にするということと、大阪に総合大学を置くということが建議されるんですが。どうも阪大だけというのではなくて、一斉に多くの学校を作るという気運が昭和になった直後というのはあったんでしょうかね。

宮本　まだ満州事変は始まってませんわな。

熊谷　まだですね。

宮本　そういう軍事力としての技術ということも考えなかった時代やからね。六年は不況対策かもしれんな。非常に悪い時代やったからね。

熊谷　昭和初期のね。

宮本　せやから生産力を上げよという考え方から、理科系を新設したのは絶対だったかもしれん。

作道　明治の末にも出てますね。大阪大学設立の議案というのは、佐多先生の伝記を見ますと。結局その明治末の大阪大学創設の動議というのが、結局大正四年の大阪医科大学になっていくわけですね。だから大阪大学というものは、どういう内容の大阪大学なのかということが、どうも明治末ではっきりしないんですが。結局は理科系という……。

中馬　ということのようですね。この本の一番最初のところを見ましても、理学部が必要であるということを盛んに書いてあるわけですね。産業、工業の基盤としての。もう一つ文章としては、現に大阪には市立商科、府立医科、官立工科の単科大学あればとなっているんですね。だから、市立商科というのは、ちゃんとここに明記してあってこれはこれでいいじゃないかというような感じにも受けますが、一方、これは某新聞社説となっていますが、そこには、大阪にはこのほかに、文部省直轄の工業大学と市立商科大学とがあると書いてあってこの三単科大学の結合を本省直轄の方法で直ちに実行の見込みがあるかどうかと。しかるとき商科大学は単科のまま綜合圏内に置くべきか。吾等の理想はすでに理科大学あれば、当然に文科大学の実現を希望される。ゆえに商大と並んで文大を起し云々と。こういうのが、やっぱりあることは当然意見として出てくるわけですね。新聞の社説には。

作道　そうしますと、昭和六年の阪大の建学の精神というのは、一言で言うとどういうことに。

藤野　理科系のサイエンスの振興ですよ。

中馬　そうですね。それははっきりしてたわけですね。

芝　それは気運であったのか、あるいは佐多さんなり楠本先生なり

……。

藤野　それは佐多先生が声を大にして言うてたことです。

芝　佐多先生のお気持ちが強う出ておりますか。

藤野　初めは相当貧弱な医学校ですから、そのときの佐多先生は、帝国大学の塁を摩するに至るべしというのが佐多先生のモットーだったんですね。帝国大学の塁を摩することを理想としていた。そんなことをぼくに聞かしてくれたのは、この間百年祭をやられた古武先生ですよ。古武先生が佐多先生の理想というものはと言って声を大にして言われた。それがわしの頭に残ってるんです。それから自分は医科大学にしてしまったですから、それから今度佐多先生が何を言ったかというたら、医科大学の学生は、解剖学から勉強しなければならんが、これは理学部の卒業生を入れたらええねやと。まず大学の理学部を勉強してきて、それぞれそれから医科の方へ変われと。

芝　やっと実現したんや。

藤野　今のアメリカがそうですか。そんなことを言われた講演を私は聞いてますよ。

中馬　先生が学生のころですか。

藤野　もちろん学生のときです。ヨーロッパを回ってきたとか、中国を回ってきたとかいう佐多先生を、われわれ学生が講演部というのをやってましたから、佐多先生に講演を頼もうやないかというて、二回ほど講演を頼んで、その中にありますよ。

芝　創設のときに、私は小竹先生から坂田幹太という方が大変ご尽力なさったという話を聞いたんですが、藤野先生は何か。

藤野　坂田幹太という人は、財界の方で大変やってたことは、恐らく西尾さんの本には出てくると思います。坂田幹太さんをキャップとして、坂田さんに言われると、いろんな人が動いたんでしょう。

宮本　何してはった人ですか。

芝　議員でもあったんでしょう。

宮本　国会議員。府会議員ですか。

芝　それがよくわからないんです。

中馬　かつての文部大臣のお父さんですか。

芝　いや、ぼくがそう言ったら、仁田先生が違うと。名古屋大学の物理の坂田昌一教授のお父さんだよと。仁田先生が言われました。

宮本　大阪の財界人は私は割によく知っているんだけど、あんまり聞きなれん名前ですな。大阪の財界人としては。

芝　だから、財界人だったのか。

藤野　財界人ですよ。いわゆる財界人ですよ。

芝　この際ちょっと調べてみたいと思ってる方の一人です。何か、帝国議会の時計を一分止めて、通過させたということです。

熊谷　ああ、有名な話ですね。

藤野　三月二十五日という、もう帝国議会が終わるという、そのぎりぎりに貴族院を、衆議院は法案通っとるんですけど、それが貴族院を通すために止まったんですよ。

熊谷　しかし先生、これは法律じゃなくて勅令なんですね。

藤野　勅令ですか。

熊谷　ええ、勅令なんですよ。

藤野　勅令を議会に。

熊谷　ええ、協賛を求めますからね。

宮本　大学令というやつですか。

熊谷　個別に勅令を出しますね。大阪に帝国大学を置く件というので勅令ですね。

中馬　阪田幹太という方は、ここに肩書きがついてないんですが、高石信五郎とか木間瀬策三、平生釟三郎、その辺と同列のころになるんです。

宮本　高石は毎日新聞ですな。片岡安さんも入ってるな。阪田幹太。片岡安さんは工業会の会長やってんな。会議所の会頭にもなりますな。加藤小太郎て知らんな。高柳松一郎、これは商工会議所の専務理事やったんよ。阪田は知らんわ。平生（釟三郎）さんは東京海上・川崎造船をやった人、甲南高等学校をつくった人。

中馬　実業家か大阪府会関係か、どっちかだろうと私は想像するんですが。

熊谷　大阪府会関係と聞いてたんですがね。

宮本　財界人は、こっちはようけ寄ってますな。白川朋吉というのは府会議長やな。小畑源之助は日本ペイント社長。大阪工業会をつくった一人。

編集室注・阪田幹太は一九〇三年東京帝国大学法科大学卒業、内務省に入り桂太郎首相の秘書官を務め、のち愛媛県知事、高知市長を歴任、一九二〇年官界を退き、大阪合同紡績（社長谷口房蔵）の役員となる。一九二九年科学研究振興を目的として設立された谷口工業奨励会の常務理事となるが、同会は阪田の意見によって設立されたという。一九三七年理学部に設置されたサイクロトロンは同会の寄贈によるものであった。（山崎正勝「大阪帝大創設を契機とする理化学振興」『科学史研究』No135所収）

木間瀬策三は、一九〇〇年東京帝国大学法科大学を卒業後、三重、千葉、茨城の各県の事務官を歴任し、新潟県内務部長をへて、一九一四年大阪内務部長に転し、翌年富山県知事となる。一九一七年招請されて、関西における土地会社の雄、安治川土地株式会社常務取締となり、経営の手腕を発揮した。（『大阪財界人物史』）

佐多愛彦と楠本長三郎

藤野　それがみんな手弁当ですよ。それは西尾さんがちょっとした謝礼ぐらい出してるかもしれんけど、みんな手弁当で行ってくれたという話は、私は聞かされているところですが。一つはみんな楠本先生の患者ですよ。

中馬　それが一番大きいですね。だから、お金も楠本先生の往診料が大分基金に入ってる。それを西尾さんが全部取り上げて金庫に入れてたという話は、ちょっと聞きましたですけどね。

藤野　まんざらうそじゃないでしょうな。

宮本　あのころ、死ぬ前というたら、大体一寸した家では来てもらうんと違いますか。ぼくらのうちでも、おばあちゃんが死ぬときにお医者さんが楠本先生を連れてきたわ。いっぺん診（み）といて、脈をとってもらわな死ねへんのと違うか。それがやっぱり親類の言い訳になるんやな。

宮本　楠本さんというたら神格化してましたもんな。

藤野　それともう一つ。楠本先生の性格としていい表現があるんで

すわ。佐多先生と財界人が話してると、佐多先生は雄弁でしょう。野心家的なところがあるから、佐多さんと話してると金出せと言われるかと思って、初めから財布のひもを締めてかかる。ところが楠本先生は、和やかな温厚な方やから楠本先生と話してると、財布のひもを締めてかかる財界人はいなかった。おのずから緩んだと。これはお二人の性格と、お二人の実力をよくあらわしている話だと思うんです。それで私は覚えとるんですよ。お二人は同年生まれです。同年生まれで百年祭をやって、そのお二人の銅像が医学部の玄関にあるわけですが。

宮本　佐多さんというのは、鹿児島の医学校を出て大学は東大選科ですか。

藤野　一番初めに月給をもらったのが東大で、介補という助手にもなれないんですからね。それで助手になったんか。助手になったけど、有名な山際勝三郎というのが卒業してきたから、山際を助手にしなければならんから、おまえやめと言われてやめさせられて、それで富山病院に行くんですが。

宮本　その負けん気みたいなものがあったんと違うかな。ずっと東大に対して。

熊谷　そのころ医学は、学問の系統からいくと、いわゆるドイツ医学ですか。もうすっかりそうなってた。

藤野　そうです。もう講義のときに、学術語、英語を話すのは、生理の先生と、細菌学の安達先生と二人だけだったですよ。この二人は英国留学から帰ってきて、プロテスタントになった人ですよ。あとは全部、外国留学はドイツですね。

熊谷　法律学の方ですと、いっぺん東京の法科大学に入って、それから各地へ行くわけですが、それでやっぱりドイツ法学なんですが、どうなんでしょうか。そういう点からいくと、適塾とのつながりですね。蘭学から始まった適塾だけど、医学の方も東京からくるということになると、適塾とのつながりというのは、ちょっと……。

宮本　完然に消えてしまうんです。英語時代になりますでしょう。大体そうでしょう。いっぺんエルメレンスの後ぐらいが、橘良佺や吉田顕三から英語式になるね。

藤野　エルメレンスの後。

中馬　後はしばらく英語です。

宮本　英語ですわ。日本全体がそうやないですか。

藤野　だから、エルメレンスの記念碑はドイツ語も、オランダ語もなしに、FOR THE MEMORY OF Dr. C. J. ERMERINS と英語で書いてあるんですよ。

中馬　あの碑は本当に英語で書いてあるので、びっくりするんですわ。

藤野　ロンドンで開業医のライセンスを取った男ですよ。それくらい苦労して、勉強してきた男ですが、大阪医学校の校長になったもんだから、校長になったらあれを建てなければならなくなって、吉田顕三という校長が、碑文はどうしようかというときに、いやこれは英語じゃと言うてやったんでしょう。そんな感じですわ。とにかく活字体の字ですわ。

宮本　大体法律でもそうですわな。普仏戦争に勝ってからドイツ語

が強くなったんと違うかな。

熊谷　やっぱり法律の方で言いますと、十年代には伊藤が向こうへ行って、プロシャから学んで、ドイツが支配的になるんですが、それまでは、英語とフランス語ですね。

宮本　司法省関係はもとフランス語系ですわな。

熊谷　それが適塾は、ああしてオランダ語をやってて、明治維新になると同時に、いったん消えるんでしょうかね。

藤野　明治維新じゃないです。明治十年まで続くんです。エルメレンスがおる間は、もう立派なもんです。どうも私は間違いないと思うんですが、大阪蘭学はドラマチックに消えたと。ドラマチックに記念碑の除幕式が行なわれて、それでもう完全に消えたんです。

宮本　清野勇さんはどうなるんです。

藤野　清野さんはドイツ医学の教授をしとった人ですね。東大医学士でね。

宮本　清野さんは岡山の第三高等中学校医学部教諭から大阪医学校に校長として赴任してくる。

中馬　藤野先生が卒業されたころに帝大になったわけですか。

藤野　私が卒業しまして、三月二十二日に、今のいわゆる勅令が決まって、そして話が決まったでしょう。そして、大阪医科大学の卒業式には楠本学長がいないんですよ。学長代理がわれわれに卒業証書をくれた。謝恩会も、お葬式というほどではないけれども、先生方はしんみりしてますからね。今の大ビルでやったのを覚えてますよ。そうしたら帝国大学に決まったと、翌日の新聞に書かれたんですわ。

中馬　卒業式どころではなかったわけですね。

藤野　卒業式は仕方なしに予定どおりにやったわけですよ。首脳部は東京に行ってますからね。たとえば有名な佐谷有吉先生とか、今村荒男先生とか、貴族院に連絡がありそうなのは、みんな東京に行っていないですからね。

中馬　学生の受け止め方というのはどうでございましたか。

藤野　冷ややかなもんですよ。

中馬　別に帝国大学になろうと関係ないというもんですか。

藤野　何にも関係ないですわ。新聞記者が来て、みんな万歳言うてくれ、写真に撮るからと言うても、だれもしやしないですよ。おまえら帰れというて追い帰した、そんな話がありましたよ。

長岡半太郎と理学部の創設

芝　この間、仁田先生に聞いたら、最初文部省は天下りの学長を押しつけてきそうな気配になったんですってね。それで、これはいかんというので、岡谷さんがおられたし、塩見の関係があったりしたんで、それで長岡半太郎先生を楠本さんが頼みに行って、引っ張ってきたと。学長に連れてきたというお話をなさってたんですが。その辺は。

藤野　私が聞いておりますのは、初めから日本第一流の理学部を今から創設しなければならない。工学部はある。理学部を創設しなければならないから、日本一流の理学者を学長に迎えないといい理学部はできない。それが楠本さんの意見だったんです。それで長岡半太郎先生をと。長岡半太郎先生の右へ出る理学者は、その時分ちょっといま

せんね。

また、長岡さんと楠本さんは同じ大村藩ですよ。隣村や。それに楠本さんの長女は長岡さんの長男のところへ嫁に行ってるんですよ。

中馬　そのときすでにですか。

藤野　すでにですよ。それが日本光学の長岡さんですよ。仁田先生が言われるようなところがあるかもしれんけど、片方では、大村藩で、姻戚関係なんですよ。だけど、長岡先生が来られて、大阪帝国大学の初代総長になられて、そして理学部をこしらえる。化学は真島利行さん。物理は八木秀次さん。数学はだれですか。そういうのを、ばっと決めて……。

芝　正田建次郎さんが来られて、あれは高木貞治準備委員ですな。ついこの間亡くなった柴田雄次先生が化学の準備委員。もうそうそうたるトップのトップが準備委員になられたと。

藤野　東北大学をつくったときのベグリュンダー（Begürunder）をそのまま、八木、真島というのを連れてきたという話やね。

宮本　八木さんは大阪出身やね。北野中学やね。

藤野　数学の正田建次郎先生なんかは、大学の助手もしたことないし、助教授もしたことないんやね。

芝　ドイツから帰ってきて、すぐのときでしょうね。

藤野　物理学校の先生をしとったんですって。ある日……。

芝　仁田先生もそうですよ。理研で遊んどったんです。

藤野　ある日、日曜にぼやっとしとったら、長岡先生が「やあ」と言うて来られて、大阪帝国大学に理学部をこしらえなきゃならんから、君、来てくれたまえというわけで、ああ、そうですかと。考えときますも何もないんだって。すぐに決まったんだって。それは正田先生ご自身から私が聞きました。そのとき先生、何しとったんですかと聞いたら、いや、ドイツから帰って、行くとこないから物理学校の先生しとったんと。今の東京理科大学でしょうね。

熊谷　藤野先生の卒業証書は。

藤野　私は大阪医科大学です。

熊谷　現在まだ。

藤野　持ってますよ。大阪医科大学の証書としては最後なんです。そして私は、卒業して、すぐにどこかに行かなきゃならないから第二外科学教室というのに入ったんですよ。岩永仁雄先生の所へ。岩永外科の副手の辞令をもらって、それで五月一日の大阪帝国大学開学式、祝賀会というものにも出たし、こっちは物好きですから、若槻礼次郎が来て講演するとか、田中隆三文部大臣が来て講演するというと、やじ馬根性で前の方へ行って、一生懸命聞いてて、総理大臣とか文部大臣とかいうのは、つまらんことしか言わんなあという印象は残ってますよ。本当に若い心に響くような演説をしたのは、時の大阪府知事、柴田善三郎。あの人の中之島公会堂での演説は、腹に響くような、村の祭りの太鼓のような響きやったですね。あの人、そういうことに関しては一生懸命でしょう。

微生物病研究所の創設

中馬　微研の創立の時分は、先生は一番詳しい。

藤野　大阪医科大学の時分に、谷口腆二先生が楠本先生に話して、楠本先生が直接山口さんに言うたんじゃないですね。いろんな財界の人に相談して、山口玄洞さんに二〇万円出してもらうということになった。そのいきさつは微研の記録にたくさんありますよ。そして、でき上がらないうちに帝国大学になって、その間に、大体貨幣価値が下がって、二〇万円ではなかなかビルディングが大きくならん。だんだん小さくなっていくんですな。山口さんに、あなたは私がせっかくあげたお金を、高いお金やったんですよ。安う使いなさるから、こんなことになるんですと。その間、三年か四年あるんですね。満州事変が起きたりなんかして、物価が急激に変わってくるわけです。

中馬　当時伝研があったんですね。伝研はもう、東大の附置研になったわけですか。

藤野　なってたわけです。

中馬　それに対抗するというか、それに似たようなものをつくりたいということだったんですね。

藤野　それがまさに谷口先生の、あそこで育ったんですからね。大正十二年の関東大震災のときに、伝研が倒れかかったもんですから、ワクチンも免疫血清もできなくなったんです。国の製造所が機能停止したんです。それで、日本みたいな南北に長い国は、もう一つぐらいセンターが必要だと。それが谷口先生の言うことだったんです。

谷口先生は、大阪の港と神戸の港の税関の嘱託なんです。外国の輸入伝染病の検疫業務を税関長が持っておったんです。税関長というのは、大蔵省の役人ですわね。それを谷口先生が懇意になられて、その連中に、コレラが入ってきた、ペストが入ってきた、天然痘が入ってきたというと、先生が行かないと、これはコレラである、これはペストであるという判定は、現場の連中ではできないですからね。先生が行って、皆やってたんです。

大蔵省の役人と懇意になった。もう一つ、先生の奥さん兄弟の義理の弟というのが、大蔵省の有力な役人なんです。そんなことで大蔵省に先生方が連絡がある。それが主計局長に転任するんです。主計局長って、予算をやるでしょう。それに吹き込んでおいて、片方、楠本先生に吹き込んでおいて、それでやったんです。

宮本　竹尾の関係はどないなるんですか。あれは微研に入ったわけですか。

藤野　あれは微研に入ったんです。それは大正年間に大阪医科大学が高等医学校から医科大学になるときに、竹尾はそのときのアクセサリーと言うたら失礼だけど、アクセサリー以上の実力として、竹尾さんを佐多先生が説得して。

宮本　あれと微研とは後で合併になっとるわけですね。微研はあくまでも山口玄洞が。

藤野　山口玄洞が本館を建てて、竹尾さんが建てたのが竹尾結核研究所、今も残ってますが、それともう一つ、ある篤志家が建てた、らい（特殊皮膚病）研究所と、この三つを合わせて官制の上で総合しただけで、建物は三つ今も別々なんです。官制をつくるときに、らいも結核も急性伝染病も入れるということでやられたんです。それは結局、山口さんの二〇万円にすでにあるプラスアルファ、ベーターを必要だ

からと言って文部省に持ち込んで動かしたんだ。

宮本　山口さんは、ぼくがつくった山口玄株式会社の社史がありますねん。あれに割に詳しい書いてますわ。その前に、あの人の何とか言う戒名がありますね。戒名の伝記がありますねん。山口玄洞何とか、忘れましたけど、その戒名のついた伝記があります。それは寄付のことばかり書いてますわ。社史も、あんまり会社のこと書くことないさかいに、寄付のことをようけ書いてる社史ですねん。それに割によく書いてますわ。学校にあるかもしれんね。

作道　ええ、ありますね。

藤野　山口玄洞さんという人は、私は会うたことはないんですけれども、尾道の出身者で、どうして金もうけしたのか知らんけど、いっぱい寄付しとるんです。

宮本　あれは、やっぱり中国ですわ。山清（やませい）と言いまして、モスリンですわ。モスリン・金巾・綿ネルの輸出で、中国貿易でもうけたんです。山清（山口清助商店）は大きくなったんです。唐物屋さんです。今でもありますけどね。ぼくは知りませんけど、息子さんが襲名して山口玄洞と。これも死にましたけどね。初代の玄洞はようけ寄付する男で、尾道の水道、女学校、大阪では山口厚生病院がありますね。それから醍醐寺、比叡山。ようけ寄付してますわ。今の松下さんみたいなもんですな寄付の数はうんと多いですな。

藤野　私はここに持ってますけど、仰景帳という一つのアルバムがあるんですわ。それに先代山口玄洞が、今言われる醍醐寺へ不動産か何かを寄付したとか、金を出したとか、あるお寺のお堂を寄付したとか、鐘つき堂を寄付した。尾道の女学校から水道から徴研まで、こんな厚い一冊のアルバムですわ。

宮本　子供がなかったでしょう。美田を残さんでもええという考え方があって、養子しましたけどね。徴研にもおられましたね。

藤野　三人養子がありまして、その長男が東大の法学部、それが二、三年前に亡くなって、その次が岡山。岡山の寄生虫の教授。それから徴研の山口先生と。三人養子があって、それに山口姓を名のらして、金をやっただけですね。

中馬　好きなことをせえというわけですね。

新制大学への転換

中馬　それでは、大分話が飛びますけれども、藤野先生、戦争中、戦後、あるいは新制大学になる時分のことで、非常に印象に残ってるとか思い出はございませんですか。先生自身は教授になっておられたと思うんですが。

藤野　なってませんねんやけど、これはいっぺん、私が言うたことをそのまま記録にされずに、私が今から資料のありかを言いますから、これをいっぺんせんさくしてもらいたいんです。皆さんは不思議に思われませんか。というのは、浪速高等学校というのは、大阪府立の高等学校ですよ。大高が国立でしょう。大高が大阪大学に吸収されるのは、これは当然ですわ。浪高がどうして大阪大学に入ったかと。入り得たか。入ってくれたから、今日非常に大阪大学は楽しとるんですけど、私にしてみれば、これは不思議な現象なんですわ。浪高ができた

のは、大阪医科大学の予科をぼくらは出たんだけど、予科をつぶすからと先生方から言われて、ああそうですかということだったんよ。そしたら間もなく、うちに大阪府立浪速高等学校という七年制の学校ができる。ぼくらに教えてくれた、大学予科のいい先生は、皆そっちの教授になる。

そういういきさつは知っとるんですね。ところがあそこは府立でしょう。それが今村総長のときに、八木先生が総長をやめられた後、今村先生が総長になられて、大阪府立の浪高が大阪大学に入ったわけですね。これを不思議に思っとったわけです。

それを公開の席で、そのいきさつをしゃべった人が、まだ今も生きとるんです。産研の所長やった青武雄名誉教授です。この先生が定年でやめるときの会で、スピーチをさせられて、皆さんご存じないと思うから話をしますがという前置きで、今村先生が西宮の南郷山に住んでなさる。その隣の家におる男が上野政次郎氏であったわけですね。

中馬　上野製薬の前の社長ですね。

藤野　上野政次郎が赤間文三さんと懇意だというんです。上野政次郎と今村先生が話しているときに、浪高が大阪大学の中に入ってくれたら、法文系をこしらえるのに都合がええなと。そうなったら、赤間さんに話なさったらよろしおまんがなと言うて、それで上野政次郎氏の家で、赤間さんを紹介して。

芝　それはこの間、原田さんが持ってこられました上野政次郎伝というのを、私全部読みました。その中にそのとおり書いてありました。

藤野　上野政次郎伝に。

芝　書いてありました。赤間さんと上野さんのことが。

藤野　それが、青さんが言われたというところを、私は言いたいんねん。

芝　青先生が恐らく……。

藤野　上野氏の方から出ただけだと、みんな信用せんかもしれんけど。

中馬　いいえ、そうじゃなくて、私の所に青先生から電話がありまして、おまえ、こんなことをやってるんなら、ぜひおれを呼んで話を聞けと。ついてはこういう資料もあると。

芝　青先生がその本を持ってこられたんです。私は全部読ましてもらいました。

藤野　ぼくは上野政次郎氏と、よく話をしたけど、上野政次郎氏からこの話を聞いたことはないんです。上野政次郎氏の紹介で赤間さんにも、私は会うたことあるけど、赤間さんからも聞いたことないねん。

芝　息子も、私よく会いますが、一度もそんな話は。

藤野　息子も言いませんな。今証人は青さんだけですよ。

芝　だけど、政次郎さん自身が書いておられる自伝でございますから。

藤野　あれはしゃべって、文筆家に書かしたんだよ。だから、逆に言うたら誇大で信憑性がないと言われるかもしれんような危険も、あるんですよ。

芝　青先生はあれを読まれて言われてるんじゃなくて、また別に何かあるんですか。

藤野　青さんはその時分に、上野政次郎氏と技術、学術的なアドバイザーとして、接触してられたんです。それで今村先生とも会うてるはずですよ。

芝　証人であるわけですね。

宮本　赤間さんは、よう阪大の何かのパーティのときにいつも来てましたな、初期からね。知事やめてからもね。それは重要な人になってるからでしょうね。

藤野　赤間さんが知事の時分には、何か宴会すると、今村先生は必ず行かれて、おまえら来いよと言うて、赤間さんが招待してくれるから行こうと言われて、私らは二、三回連れていかれましたよ。

中馬　この間、サンデー毎日を読んでおりましたら、神戸大学のことが載っておりまして、それにちょっと、コラムみたいなところに、昭和二十二年ごろ、大阪大学が新制大学になるに当たって、神戸大学との合併の話があったと。それは具体的にはどんなことなんですか。

宮本　よく知りませんけど、聞いてますのは、神戸商大がありましたね。商業大学とか、経済大学と言うておったんですが、それと合わせたら日本一の大学になるということで、そういう話はあったんですね。ところが府県、越境がいかんというわけです。それでとまったわけです。あれは大分とやかましかったんじゃないですか。ぼくの来る前にそういう話があったらしいですよ。

中馬　藤野先生はそのうわさというか、その動きはご存じですか。

宮本　神戸の大学の教授会にかかったみたいですよ。ぼくは神戸大学の先生に聞きましたけど。それはええという賛成の人もあったらしいですよ。当時今村先生の隣組というのがあったと推測されます。今村先生宅の向かいが坂本弥三郎で、こちら側が目崎憲司宅。それで飯島幡司先生もあの近所ですわ。南郷山に住んどるんです。やっぱり文科系、特に経済をつくるについては、目崎さんも協議会にかかる前に決まってても。隣やから。それから向かいは坂本弥三郎という神戸大学の偉い先生がいる。それから飯島先生も神戸でしょう。そこら辺の連中で、やっぱりあったんやないかと思うんですわ。神戸を吸収したら、一緒になったらええでということが。後でもすべて、その線から来とるわけです。目崎先生も皆。ぼく来たときでも、目崎さんの所に行った後、すぐに今村先生宅に連れていってくれたわ。隣やったから。ああいう隣組人事みたいなもんがあったんやないかと思うんですわ。

熊谷　法は宮本英雄先生。それから我妻栄、滝川幸辰。この三人に今村先生が頼まれたというんですが。

宮本　それも皆、形式的にはそうやねん。形式的には経済科も東大と京大と、本庄栄次郎先生、舞出長五郎先生と、それから京都の静田均教授に頼んだんですわ。本庄先生はもと大阪商大の学長でした。それ以外に、隣組みたいなものでしょっちゅう聞いてはったらしいね。

芝　仁田先生の、また話ですが、ぼくもサンデー毎日を読みましたけど、二十何年と書いてありましたか。

中馬　二十二年。

芝　仁田先生が理学部長をやめられた直後に、今の神戸大学と大阪大学の合併論が出てきて、自分は使いで、田中薫というて、田中千代の主人の所へ交渉に行ったと。それでかなり話は煮詰まってきとった

と。恐らくその後でしょうね。ところが、ある日突然、マッカーサーから、今先生のおっしゃった越境論の話やと思いますが、マッカーサーからぴしゃっときたんで、途端にだめになったとおっしゃってました。

宮本　かなり話はあったらしいですね。

法学部の創設

中馬　ぼつぼつ話がそっちへ行きましたので、法文学部創立の話というところ辺に、重点を移したいと思います。

藤野　法文学部をこしらえなければいかんということは、医学部、理学部の教授のどなたあたりから出たんですか。今村先生が……。

宮本　それもあったかもしれんけど、やっぱり白線浪人の問題がありましたね。白線浪人を救わないかん。新制になるから、旧制高等学校を出た人が困る。とにかく阪大は新制でできたんやなくて旧制でできたと。旧制でできて、名古屋と大阪と北海道だけが旧制で出発したわけや。旧制高校出身者を三年間とりましたよ。

藤野　工学部に田中晋輔という教授が新制に移りかわるときのことが一番詳しいといわれています。

宮本　何かよそは皆、旧制の学生がよかって、新制の学生が悪いと言いよんねんけど、阪大は旧制の方が悪いんですわ。旧制は皆、落ちた人が来たね。一回目は。三月やなしにずっと後から入ったでしょう。白線浪人を救うことがかなりありましたわ。

熊谷　それにしては大きなことをやったもんですね。白線浪人を救う……。

藤野　法文系をこしらえるということは、日本の全体から見て、医、理、工の三学部だけではおもしろくないんで、政治、行政をつかさどっている連中を、同じ大学から出さないかんというような話は、雑談の間ではわれわれのとこでも出てましたけど、われわれがしゃべっているのは、あくまでも青二才の快気炎だけで、今村先生のレベルで、周辺で、そういう話が出たんでしょうね。

中馬　『大阪大学二十五年誌』によりますと、文学部の沿革のところで、本学に文科系学部を設けることについては、昭和六年、本学が総合大学として組織された当初から考えられていたと。しかし……といろいろ書いてありまして、満州事変、次いで太平洋戦争に突入したため、その実現されぬうちに終戦を迎えたが、その後の混乱、動揺の時期にあって、大学当局者は、大学教育の実を上げるためには、文科系学部の必要性を思い、また財界人の間にも、大都市の総合大学として、このことを要望する声が高まったので、昭和二十二年には計画が具体化したと。こういうことになってるんです。

宮本　それはそうでしょうな。

作道　今村先生はそういうことを言われましたね、その二十五年誌のときに。

宮本　技術尊重の時代があったから顧みられなかったけど、ちょうどそのような情勢が出てたと思う。皆いっぺん旧制の人は入れてしまわないかんと。実際上はそういうこともあったんじゃないですか。三年の後は高等学校を出た人も新制に入れましたね。それまでは皆旧制

として卒業しました。要望がありましたよ。新制と旧制と並んでましたから。その辺は確かに、なるべく入れてやれというのがありましたわ。古い高等学校を出た人に。政策的にそういうことが非常にあったんやないですかね。

中馬　結局、旧制高等学校を出て兵隊に行って、そして帰ってきたのでどっとそういう人がふえたわけですね。特にそれが文化系に多かったわけでしょうな。理科系は兵隊に行かんで済みましたから、ずっと普通のとおり上がってましたから。

宮本　士官学校を出たのがおりましたね。

作道　さっきのお話ですが、昭和二十二年ごろ阪神大学案ということは、結局神戸の経済とか経営とか法律とか、それを大阪に一緒にしようということですね。それがマッカーサーでだめになった。そうすると阪大自体で、阪神の合同がなくとも、法律、経、文科を持とうと。おまけには、赤間さんが隣組で話し合って、府会に持っていって、とにかく大阪としてはそういう総合大学をつくりたいということで、府会を了承させたわけなんでしょうね。

熊谷　神戸大学は、あの本館自身がＧＨＱの占領に入った時期があるんじゃないですか。

宮本　なってません。大阪市大だけですわ。市大は戦争中に向こうが軍事施設になってます。文教施設は占領しないはずだったんだけど、市大だけは、戦争中やっていたわけです。貸さなしようがなかったから。それでやられたわけです。

芝　同じころに、農学部の創設案もあったらしいですね。三重と鳥取を合わせて、大阪の農学部と。これも恐らくマッカーサーであかんようになったと。

作道　あれもマッカーサーですか。

芝　じゃないかなあと想像するんですがね。

宮本　府立農学校がありましたね。あれが府立大学に行ったからね。

芝　ここの園芸学校をもうちょっと大きくして、それで三重と鳥取を合わせてという話やったです。ところが、それがだめになったんで結局もやもやしてる間に、府立大学になったと。

三谷　府立大は昔からあったやつですね。農場試験場のそばの。あれは農学校という古いやつ。あれが母体になってますね。

宮本　しかし浪高でも、やっぱりもやもやしてたんと違いますか。半分ぐらいの先生が府立へ行きましたでしょう。それから本なんかでも、大高の本は皆こっちへ入ってるけど、浪高の本はあっちへようけ行ってますよ。

中馬　そうらしいですね。

宮本　大日本史料とか、国史大系とか、あんな本は高等学校にないはずがないと思って捜したらあれへんのですわ。皆あっちへ行ってしもて。

熊谷　イ号館の下の、このぐらいの所に蔵書がちょっとあっただけですわ。

宮本　双書類は大概行ってしもたらしいですわ。また、浪高の卒業生が寄付してたんですね。せやからそれらの本はうちのもんやと言うて。先生も大分あっちへ行ったんと違いますか。ドイツ語の先生なん

かも。

三谷　そうですね。私はあの時分府大におったんですよ。事前の話や背景は今初めてうかがいましたですけど、あれは結局交換なんですね。中百舌鳥にございました国立の大阪工専が府へ移管されて、バーターで浪速高等学校は国立へ行ったということです。それで図書館とか先生方も、大分あっちへ行かれて、向こうは工専ですから、機械とかそういうのは持ってたんです。蔵書なんかはございませんわね。それであちらへ大分行ったということです。

宮本　地面と建物だけをもろて、中身はかなりあっちへ行ったらしいですね。

作道　みんなバーターですか。

三谷　バーターなんです。だから最初は浪速大学と言いましたもん。府立浪速大学とね。名前だけ行ったんです。

中馬　宮本先生、初め法文学部として創立され、それからずっと各学部に分かれていった、その辺のところを、ご説明できませんでしょうか。

宮本　ぼくが来たのは一年してからなんですわ。大体できますときは、先ほど言ったように、隣組人事もあったけれども、大体形式的には経済は、東大の舞出長五郎先生、京大の静田均先生とそれからぼくの先生の本庄栄次郎先生とが創立委員ですわ。実際上は飯島先生も経済については関係しとったんじゃないですかな。そんなんでできたそうですが、目崎さんよりも先に、その三人の意向の合うたんが一谷さんですよ。その上では安井琢磨君があったんです。三つともの推薦で決まった。安井君は来ると言うて来なかったんです。東北大の足を洗えないから兼任にしてくれというわけです。兼任になって来てはって、三人できたから教授会を組織するということになって、後は教授会でやったんですわ。

それからまた、神戸大学の北野君とか山下君を入れて、兼任教授をこしらえて五人つくってやったわけや。本庄先生は入るように言うてられたんですけど、ページになるかならんかはっきりしなかった、大阪商大（市大）やめた後やったから。それでもたもたしてられて、自分からお断りになって、それからぼくが出てきたんじゃないかと思うんですけど、ようわかりませんねん。そこら辺はぼくはまだおりませんから。そんなんで決まってきて、教授会を組織して傍島さんとか平田さんとかいうのが、教授会で、だんだんそういう関係者が決まってきて、できたように思います。

高田先生もやっぱり黒幕ですわ。それもページやったんです。戦争中民族研究所の所長をしてられたから。だから表向き出られなかったけれども、飯島さんと仲ええかったからね。飯島先生と今村さんとは隣組やから、高田先生も初めから相談に乗っておられた。のちに安井君がもたもた言うてなかなか来ないから、とうとう高田先生に入ってもらうということに決まったわけや。ページも解けたことだし。

それで、年をくってられたけれども、定年制を五年間停止しましたから高田先生がしばらくしてお入りになったんです。安井君が来ないということがはっきりしたんと。ぼくも初め一年間兼任で来たんですよ。九大が離してくれなかって兼任で来たけれども、早う専任にして

もらわないと旅費がないんですわ、貧乏でしたから。兼任ばかりようけできたら、もういけないということは、目崎さんたちやかましい言うたよ。なんぼ偉い先生でも、兼任でやられたら、やっぱりやめてもろて、専任にしてもらわないかんというのが出てきて、それで安井君はいっぺん切れたわけです。後でまた研究所ができたときに帰ってこられたんです。そんなんで法学部とか、文学部のことはあまり私知らないんですけど、文学部は文学部で、今言ったように創立委員を決めて、法学部は滝川幸辰先生と、だれでしたかな。東大と京大と……。

熊谷　宮本英雄先生です。

宮本　宮本先生は町におられたけれども、阪急なんかにおられたんですね。常任してられたんですね。

熊谷　それで我妻栄先生は東京ですから、宮本先生は当時大学に籍がなかったでしょう。だから一番よく動いてたんは滝川先生じゃないですかね。

宮本　滝川さんですな。大体、滝川先生の関係者と、佐々木先生の関係者が入ってきて、それから武藤さんなんかは、どういう関係か知りませんのや。

熊谷　武藤先生は、ちょっと遅れるんですが、今村先生と武藤先生は非常に懇意だったようですね。

宮本　そうですね。あれはやっぱり、今村先生の関係者ですね。表面上は三人の推薦者をこしらえてんねんけど、必ずしもそうじゃなしに、今村先生が老大家とか何かで聞かれて、相談して、いろいろと浮かび上がってきたことがあるんじゃないですか。初期は、教授会を組織するまでは。だからいろいろの人が入ってきた。

割に東大と九大はようけ来たわけですわ。京都はあんまり来ないし、九大はたくさん来ましたね。小島先生、蔵内先生ね、それから武藤先生ね。まだそのほかたくさん来ました。東北も大体来てました。関西学院とか、皆割に呼ばれて、阪大は外を皆つぶすのかと言うたくらいですわ。このかいわいの学校が。それから、外国語学校の仏語の先生を皆迎えた。林君とか和田君とか。つぶすと言うより全滅してしもたんですね。

外大も一緒になるんかという話もありましてん。あったんですけれども、外語の方で一本でやろうという話になったんです。向こうも、英文学とか仏文学、ドイツ文学、あんなんはええけれども、ほかのややこしい語学の人は困りよるから、やっぱり一本で別にやろうと言うて。反対が強かって別になったわけです。

藤野　宮本さんのように、大阪がふるさとの人は大阪大学に来るのは、気楽に来られるんだけれども、蔵内さんは。

宮本　大体そういう人ばっかりですよ。小島さんも大阪でしょう。蔵内さんは、あの人もバージやないんですけど、自分でやめてはったんです。そやから来られたんです。後は皆、小島さんでもぼくでも、みんな大阪出身です。安井君でも北野中学です。大阪出身をねらいはったんです。

藤野　だけど、今のお話にでた、高田保馬先生というのは、和服着てはかまはいて、あの先生のあの姿にはぼくらびっくりしたなあ。戦後でも。あんなときにはかまはいて紋つきの羽織着て。

宮本　ずっとそうやったんです。あの時分はあんな人多かったです。

中馬　正田先生がよく和服でおられましたよ。

藤野　いや、大学の会合に高田先生は羽織はかまで。

宮本　ちょっと洋服着られたこともありましたけど。一番最初は桑田さんという人が法文学部の学部長になられた。これは、桑田、心理学の先生ですな、たしか。東大出身の。

中馬　その先生あての今村先生の手紙が現存しておって、それが非常に貴重な資料だというて、梅渓教授が言うてましたですな。

宮本　あの人が文科系をつくる元締めみたいな格好になってましたね。

熊谷　第一代学部長ですよね。

宮本　そんなんで、ぼくは経済のことしか知りませんけれども、初めは兼任教授も入れて教授会を組織して、そして傍島さんとか平田さんとか、またぼくも来たけれども、九大が許してくれなかったから兼任で来ましたんですよ。次の年に、金がないから旅費出すのもったいないから、早う専任になれと目崎さんに言われたんを覚えてますわ。

社会経済研究所の創立

中馬　この間宮本先生のお書きになった抜き刷りをいただきまして、読ましていただいたら、先生が学部長のときでございましたか、社研ができると。社研ともう一つ経営学科ですか、それで大分ご苦労になったということを、お書きになってましたが、どういうことでございましたか。

宮本　あれは、法文学部ができて、法経学部になりまして、文学部が分かれて経済と一緒になったんでございますけれども、そのときはたしか、小野木常さん。小野キツネって言うとってんけどね。学部長で、だんだん来たんですけれども、初め経済学科は三、三、三でできたんです。三講座、三講座、三講座で、九講座で出発したわけです。小さい学科やったんですけど、そのころから、早く研究所をつくらないかんという案がありまして、研究所をつくってくれということを、ぼくも目崎さんにも言うてましたし、まわりが実務系やったから、初めは貿易研究所みたいな所をつくろうという案もあったんです。それからしばらくして、法文経一緒にして何かしようという案もあったわけです。そこへ木村権右衛門という方が家一軒を寄付すると申出られ、そこで何かたまりをこしらえて文科系の大阪の文化風俗の研究をやろうという案がありましたよ。それに、小島吉雄さんなんかがえらい乗り気で、ぼくも好きやさかい一緒にやろうと言うてたん。それが経済に帰ってきたら、そんなもんあかんのですわ。そんなのん気なこと言うてどないするねんというわけや。

九州大学に九州文化史研究所というのがありましてん。ああいう九州の研究をする所なものをつくったらいいと言うて、ぼくらはやろうと。それも言うたことがあります。ところが高田先生が来られてから、社会学と経済学と一緒にして、社会経済研究所をつくろうという案が起こってきた。しかし実際上は数理経済学の人が入ってきましたし、あれは正田建次郎先生あたりも、よりその方を賛成してはったんですね。赤堀先生もそうやったし、阪大の経済学部できたときに、目崎さ

んなんかは財界とつながりがあり、またぼくらも多少ありましたから、大阪大学懇談会というのをつくってもろたんです。工藤友恵さんが関経連ができたときにおりましたから、工藤友恵さんとこへ行って、初め雑誌を発行してもらおうと。今の『大阪大学経済学』です。阪大は文科系がなかったから、こういうもんを出すことに理解がないんです。理解がなくて、校費使たらあかん、よそへ寄贈したらいかんとむずかしかったんです。どこの学校でもやってまっせと言うんだけど、学生から金を取ると言うたら、それもいかんと言うんですわ。それで何べんも本部とけんかしたんです。

一番初めに工藤さんとこへ援助してもらおうと相談に行った。各会社に一万円ずつ、四十社ぐらいつくりましたかね。それでこれを出したわけです。そのかわりに反対給付として話をせえということやったんです。交代に関経連へ行って話をしたんです。それが阪大懇談会ですわ。

それがだんだん進んできて、もうちょっと上なもんにつくりたいということでしたが、財界もまたわからへんのですわ。わからへんのやけども数理経済学はマル経と違うさかい、数理経済学はわからへんのやけど、あれは一番安全やと。わからへんくせに数理経済学やったら大いに援助したるというのがありましてね。

そこもありまして寄付講座をもろたんです、財界から。それで二つか三つになって、初めは施設ですわ。それから森島君とか市村君とか秀才が出てきてよい評判を上げましたし、世界的に評判を上げましたから、非常に後援する人が多くなって、できてきたんですが。

それからまた、ぼくはたしか正田さんに聞いたんかな、赤堀さんに聞いたんかもしれませんけど、京都の人文とか東大の社研、阪大の産研というのは失敗やったと。これからは、空漠たる、わけのわからん研究所はいかんのや。がん研とか微研とか、目的のはっきりした小さな研究所やないとこれからできないんだ。ああいう大きな社会経済研究所というのは、もうあかんと言われて、それならそういうことで変えましょうと言うて、数理経済研究所かエコノメトリクス研究所にしましょうということを、ぼくら言うたんです。言うて帰ってきたら、ほかは皆反対ですわ。文学部も皆、一株持とうと初めは思ってんのに、法学部も皆ね。皆反対やけど、帰ってきたら、高田先生もまた反対ですねん。名誉教授の会のときに出てきて、あれはわしがつくって、社会経済研究所という名前やさかい、社会経済研究所にしないといかんと言われた。中身はもう数理経済研究所になってしまっていたけれども、その名前は高田先生のお声がかりで残りましたけどね。

寄付講座も四つになって、五つになったら研究所ができるというんで、ぼくの学部長のときに研究所にしてもらったんです。それでまた、安井君をもういっぺん呼びにいって、初代の所長になってもらった。

藤野　今の話の中で一つ気になるのは、赤堀先生が総長のとき、数理経済研究所に看板をかえると言うて、そして高田保馬さんにこっぴどくしかられたと言うてましたよ。

宮本　それは、実際上はそうしたらつくりやすいという案がありましてん。正田先生も赤堀さんも。高田先生も腹ではそれを望んではったかもしれんねんけども、初めに社会経済とつく看板を掲げてはるさ

かい、いまさら変えられへんから、あの看板だけは置いといてくれと言うてましたよ。

藤野　研究所の看板というたら簡単なんですけど、戦後理学部に生物ができてきたでしょう。近く薬学ができる。薬学だってどうせ微生物やるだろうと。それで微生物病研究所の病の字を外せという意見が本部で、その時分は今村先生が総長のときですわ、出たというので、微研所長が、私の先生の谷口先生が、おい藤野、こんな話があるんやけどどうしようと。いや、それはやめときなさいと。これは病院をつくって、そして微生物病研究所として出発したんだから、病の字は外さん方がよろしいと言うたら、わかったと。それから後、内部ではあんまり話題にならなかったですね。だけど一度は出たんです。それはちょうど理学部の生物学ができるということとひっかけて。

今は、法学部系統やら文学部系統の附置研究所というのはないんですか。

熊谷　ないですね。全然。

作道　ぜひほしいと思いますね。もっと文科系にですね。

藤野　今村総長の言葉の中で是非残しといてもらいたいものの一つとして。「いい大学にはいい研究所がある」というのがあります。ぼくが、先生、逆も真なりですかと言うたら、そうだなあと。

熊谷　阪大は総長が、研究所からよく出られたですね。京大の人文科学の教授なんかが、阪大はええと言うんですよね。研究所でもいい人がおったら総長にするねんと。京大は、もう研究所から総長はほとんど出ませんからね。

中馬　大阪大学は創立以来関西財界との関係が深かったということで、大阪大学後援会というものが現在あるわけですけれども、記録によりますと、これができたのは昭和二十六年三月であります。どういういきさつでこういうものを設立しようということになったか、先生ご存じですか。

宮本　あれは杉さんが中心になって。

中馬　会長、杉道助、理事長、今村荒男と。

宮本　あのときは、ここの買収とか、何かがあったんですわ。ここ（豊中）の土地を入手するために杉さんが中心になって。それと杉さんとでいろいろおやりになって。

中馬　この理事の名簿を見ますと、あらゆる所が入ってますね。

宮本　大体会議所ですわ。

藤野　その理事団体が今も生きとるんでしょう。

藤野　今は芦原さんが会長でしょう。

中馬　そうだと思います。

藤野　あの大阪大学後援会があるから、今度の適塾の募金などがうまくいっとるんですよ。

宮本　産研自体は工業会が力を入れてましたね。工業会が何でもやってましたね。

産業科学研究所の創設

藤野　産業科学という日本語は、あの時分はないですよ。それを産業科学研究所をこしらえないかんと。ちょうど満州事変の後ですから

ね。大阪財界の連中の意見が一致して、それを楠本先生がまとめて文部省に持っていって、文部大臣を大阪財界が招待して説得する。そのとき、東京のある料亭に皆集まったんですって。そのときに安宅君が言いましてねという話です。それが安宅産業の安宅さんですけどね。これだけみんな大阪から熱心に集まってもらったら、今晩は大阪にはだれもいないなあと言うたと。それくらい集まったんですわ。

中馬　昭和十二年ごろでございますか。

宮本　伊藤忠兵衛さんと。

藤野　その忠兵衛さんが中心でしょうね。

熊谷　産研の原田さんが、この委員会に来てらっしゃるもんですから、お話を聞くんですが、私どもは言葉だけでいくと、産研というたら鉄やらアルミやら、そんなんばっかりつくっとる、研究しとるんかなあという気がしてたんですが、ところが、食糧科学というのに非常に近いものをやったり、なぜあれは産業科学という名称にされたんでしょうかね。

藤野　あれはちょうど、満州事変からシナ事変の始まる、その中間ですから、あれができたのは。

熊谷　産業という言葉が非常にもてた時代ですね。

藤野　本当に軍事工業ですよ。

初期に入られたのは、超短波真空管をつくった岡部金治郎さんだ。あれは文化勲章の第何号かですわ。あの方が理学部でもなし、工学部でもなしに産研の教授なんですからね。

中馬　一番初めは、無線通信・岡部と書いてありますね。それから、金属材料・高橋、高分子有機化学・村橋と、この三つです。

藤野　そこへ、超音波の雄山さんが加わって、言うならば戦時科学研究所みたいなもんですよ。

中馬　そう書いてありますね。その大東亜戦争後、極超短波の二部門、それから戦時食糧部門、これは二国先生です。やっぱりこれは鋭い戦時研究ですな。

芝　産研に音響科学研究部というのがありまして、今はもうなくなってるんですが、それが今の超短波やね。

藤野　産研のできたのは、昭和十三年ごろでしょう。

宮本　大阪工業会の六十年史とか五十年史に、割に詳しく私が書いてますわ。

藤野　今だから言えますけれども、次男坊の産業科学研究所というのが、戦時研究者の集まりという脚光を浴びて、それで、時の総長、大阪大学は次男坊を大事にして、長男である微研を大事にしてくれなかったと。これはわれわれの先生の谷口先生が口ぐせのように言うてました。

今ちょっと山本為さんの話が出てましたが、歯学部ができたときだって、山本為三郎さんが、歯学部の初代部長の弓倉さんに頼まれて、大変骨を折っとるんですよ。それをぼくらは山本為三郎さんからじかに聞いてるんです。それは今、名誉教授の永井巌君、あの方に聞いてくださると、歯学部創立のときのことが裏話から秘話は全部出ます。ところが薬学の創立のときには、だれがどう働いたのかは私は知らんのですが、初代の薬学部長は村上信三さんですね。

宮本　村上さんというのは、専門学校で校長さんやった人ですね。そしたら定年がないねん。阪大に入ったためにすぐに定年になってしもた。偉い人やったですが。私立学校のままならまだまだいけてんけど、阪大への編入を自分で一生懸命やって、それで定年で切れたとかいう話でした。

藤野　定年でやめられて、間もなく病気で亡くなりましたね。

中馬　私立の大学を合併するわけですから、さっきの府立以上にいろいろと問題がございましたでしょうね。

藤野　あったでしょうね。だけどこれはこうして見ると、学校が伸びないということを関係者、卒業生やら何やらに村上さんの人徳で説得したように聞いてますよ。

中馬　この記録では、合併の手続、及び在学生の処理については、文部省内には、その実現に対して異議もあったと。しかしその間、今村総長及び吉松、赤堀、黒津の各教授、そのほかに事務局長田淵、および薬学専門学校長村上校長の熱心な努力と、さらに左藤義詮文部政務次官のあっせんを得ると書いてありますね。やっぱりここで出てきますな。文部当局の了解を得るようになり、その苦心配慮によって、ようやく合併が実現するに至ったと。左藤さんが相当動いたでしょうな。

宮本　山本さんのことは、赤堀さんやら正田さんが追悼録に割に詳しく書いてはるね。山本さんの追悼録に、阪大が非常にお世話になったということを。とにかく歯学部もたしか山本さんと違いますか。

藤野　それと吹田移転でしょう。

宮本　吹田移転も、岡田君が書いてますな。最近もろたけど、向こうの記念誌に吹田移転のことを。あれは工学部の先生も関係したようやね。

中馬　まだまだお話は尽きないと思いますが、予定の時間がきましたので、これで終了させていただきます。どうも有難うございました。